さらなる研究を期待して

千葉市総合展覧会科学部門は本年度で６０回を迎え、科学論文集も第５７集を完成させることができました。この総合展は、千葉県科学作品展同様、半世紀を越える歴史と伝統を誇っています。この栄えある総合展で入賞された皆さんは、日頃の努力が報われ、喜びもひとしおのことと思います。

今年の科学工夫作品では、「日常生活の中でこんな物があったらもっと便利になるだろうな」、「こんなおもちゃがあったら楽しいだろうな」といった皆さんの夢や希望が感じられ、アイデアに溢れ、楽しい気持ちにさせてくれる作品が多くありました。また科学論文では、身近な生物や生活の中から、「どう成長するんだろう」「不思議だな」、という疑問を持ち、粘り強く観察して結果を出し、自然のきまりを発見しているものが多く、研究への熱心な取組がわかる、すばらしい論文ばかりでした。

さて昨年、約７７万～１２万６千年前の地質年代の名称が、ラテン語で千葉時代を意味する「チバニアン」となりました。ネアンデルタール人が生きていた頃の時代で、約７７万年前に地球の磁気が南北で逆転する現象が起きました。地球の歴史を刻む地質年代に日本の名前が付くのは初めてで、こうした現象を千葉の地層で見ることができるのは、大変誇らしいことです。欧州を中心に発展してきた地質学で日本の存在感が高まり、世界標準の一角を日本が担うことで、地学への関心の高まりも期待されています。千葉の地層が選ばれたのは、地層に含まれる火山灰や花粉、微生物、鉱物など、詳しく調べて分析し、学術的な価値が高いというアピールが実ったからです。

受賞した皆さんも、身近にあるあらゆる場面で、追究したり、工夫したりする心を忘れずに、研究し続けて欲しいと思います。今日の感激を忘れずにさらに学習を深めて、日本や世界の人々の平和と繁栄のために役立つ人になってください。心から期待しています。

結びに、この作品展の今後の発展と、役員の皆様のご尽力に心より感謝して、ご挨拶とさせていただきます。

平成３０年３月

千葉市教育委員会学校教育部
教育指導課長　中嶋　のり子